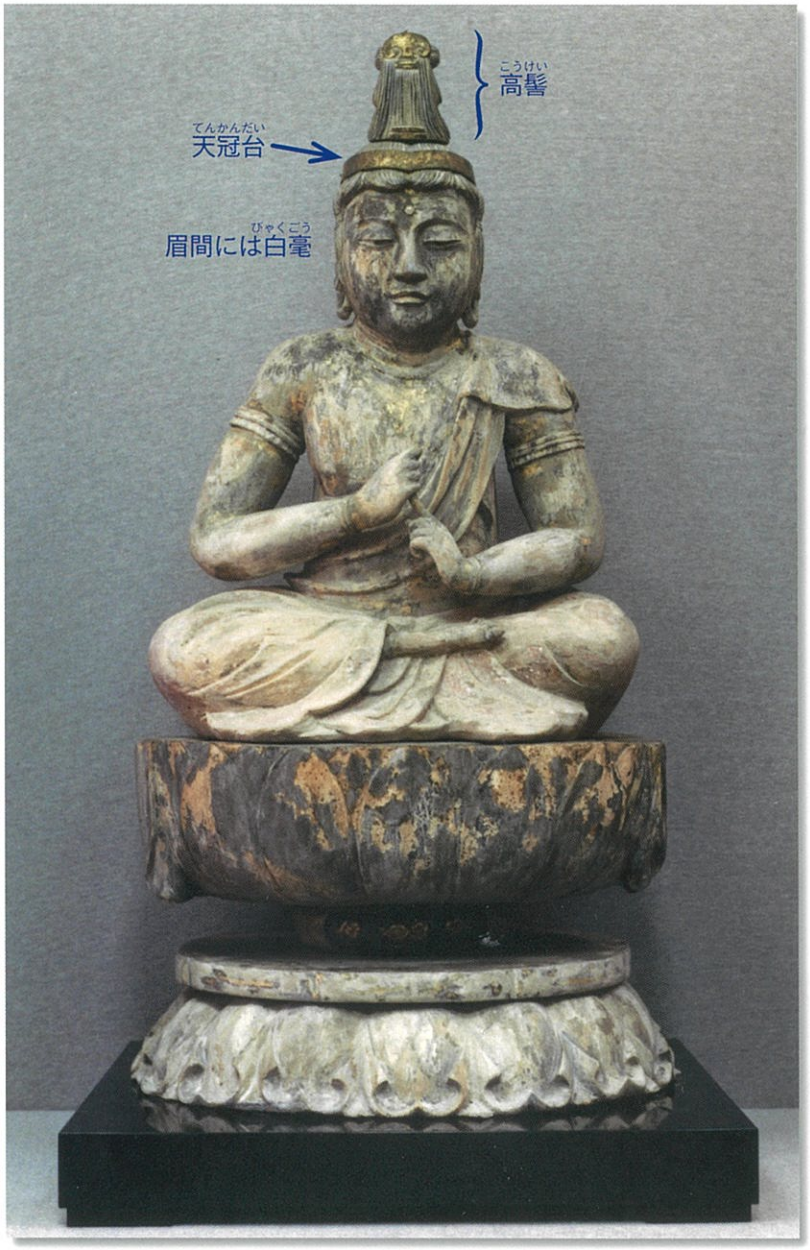
大日如来坐像

大日如来坐像は、古賀市青柳2603番地の大日堂に祀られています。岳越山のふもとに位置し、旧唐津街道（現在の県道504号線）を挟み、五所八幡宮と相対しています。

密教で大日如来は宇宙そのものを示し、すべての命あるものは大日如来から生まれたとされています。この大日如来像は、胸前で左手の人さし指を立て、左手の人さし指を右手で包み込む智拳印（ちけんいん）を結び、結跏趺坐（けっかふざ）という仏教における最も尊い坐り方をされています。乗せる片足の上下でその意味も異なり、右写真のように、先に左足を右腿の上に乗せ右足を左腿の上に乗せる方法を吉祥坐（きちじょうざ）といい、これは悟りを開いた者の坐法です。

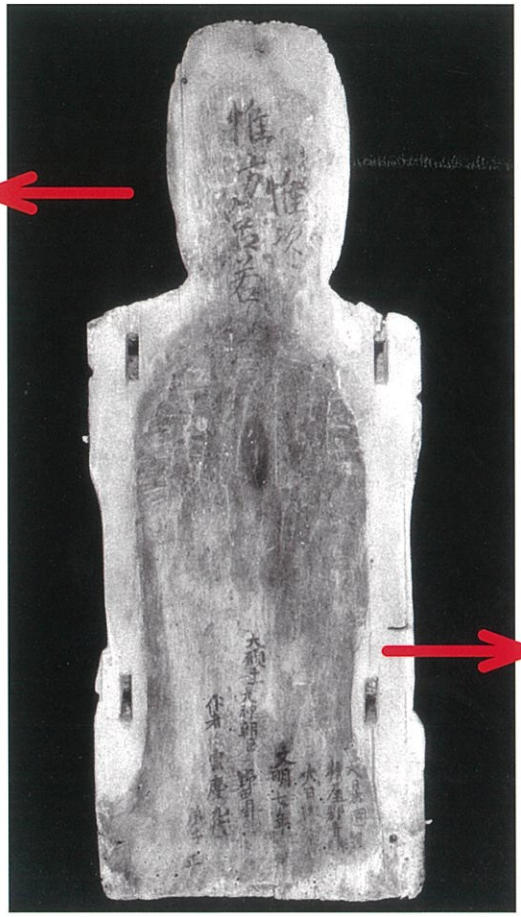
像高76.2cm、台座46.3cm。本体は頭部・胴体部の基本部三材が前後に寄せ合わされた寄木造り。台座は楠材の一木造で、蓮の花弁の彫刻で装飾されています。



白毫（びゃくごう）	仏（如来）の眉間のやや上に生えているとされる白く長い毛。右巻きに丸まっており、伸ばすと1丈5尺（約4.5メートル）あるとされる。
高髻（こうけい）	頭上にもとどりを結んでいる髪型。
天冠台（てんかんだい）	仏や天人がつける宝冠を受けるくり出しの部分。

造立から時を経た今日、このような上品で宮廷風な仏像を拝することができるのは、数回にわたる修理修復を行ってこられた、地域の皆さんの尽力の賜物です。長い年月、日光や風雨にさらされ、色あせて古びた色合いになった落ち着いた風情をそのままに、昭和62年に篤志家の熱意によって奈良で修理が行われました。失われていた白毫は水晶で新たに作られ、高髻は以前のものが天部（梵天や帝釈天など仏を守護する神々の総称）の形をしていたため、檜材で作り直されました。また、台座天板が亡失していた台座も修復されました。

惟方　惟次
宮若



大願主大神朝臣
作者從雲慶
弟子九野田閑
文明七年
大日本國筑
糟屋郡青柳
大日學
正

この修理の際、体内に銘が発見されました【上写真参照】。頭部の裏側には三人の名前と思われる『惟方　惟次　宮若』とあり、胴体部分裏側には「文明七年」（1457年：室町時代）や作者などが書かれていましたが、この２箇所の銘は筆跡が異なります。寄木造りは分解できる構造であることからも、銘が書かれた時期が同じであったかどうかは不明で、作成時期は確定できません。

この仏像は美術的にはもちろん、宗教的・歴史的にも重要な文化財です。平成２年４月には古賀市指定文化財に指定されています。

修理時の写真→